

令和元年度 女性医師支援担当者連絡会

沖縄県医師会女性医師部会 副部長 銘苺 桂子



日本医師会女性医師支援センター・日本医学会連合共催 令和元年度 女性医師支援担当者連絡会

日 時：令和元年 12 月 8 日（日）
13 時 00 分～16 時 30 分
場 所：日本医師会館 大講堂
司会・進行：日本医師会常任理事 道永 麻里

次 第

開 会

接 拶 日本医師会会長 横倉 義武
日本医学会連合会長 門田 守人

1. 日本医師会女性医師支援センターの取り組みについて
日本医師会女性医師支援センター
センター長 今村 聡
2. 『病児・病後児保育およびいわゆる学童保育に対する支援の現状』について
日本医師会常任理事 平川 俊夫
『女性医師支援に関するアンケート調査』について
日本医師会女性医師支援センター
参与 上家 和子
3. 男女共同参画など多様な背景を持つ会員の学術活動への参画と今後の支援方策に関する調査結果について
日本医学会連合 男女共同参画等検討委員会
委員長 名越 澄子
4. 各団体の取り組みから
座長：日本医師会 常任理事 平川 俊夫
日本医学会連合 副会長 岸 玲子
 - (1) 大分大学医学部 松浦 恵子
(大分大学副学長 (ダイバーシティ担当)
女性医療人キャリア支援センター副センター長)
 - (2) 帝京大学医学部 多田 弥生
(皮膚科学講座主任教授 男女共同参画推進委員)
 - (3) 日本腎臓学会 宮崎 真理子 (東北大学)
 - (4) 日本核医学会 大野 和子 (京都医療科学文学)
 - (5) 神奈川県医師会 片岡 正 (川崎市医師会副会長)
 - (6) 山口県医師会 今村 孝子 (山口県医師会副会長)
5. 質疑応答および総論
進行：日本医師会 常任理事 小玉 弘之
日本医学会連合 理事 苺田 香苗

6. 総括 参議院議員 白見 はなこ
閉 会

女性医師支援は必要か

沖縄県医師会女性医師部会で女性医師支援の活動を始めて10年になる。H19年に初めて女性医師フォーラムを開催し、女性医師が育児をしながら仕事を続けていくにはどうしたらいいのかを議論した。ほんの10年前のことだが、当時の女性医師は、育児をするために、周囲に迷惑をかけないように、フルタイムを辞める人がほとんどであった。しかしながらこの短期間で、女性医師の働く環境は目覚ましく改善し、産休・育児休暇の取得や時短勤務での復職などが多くの病院で可能となりつつある。今回の発表も、院内保育や病児保育のみならず、学童保育にまで支援要請が及んでいた。ここまでくると過保護感が否めないし、これを税金を投じて行うならば、ほかの業種との公平性について議論せねばなるまい。

しかしながら、やはり女性医師の定着しない科があるのも事実である。沖縄県内では、外科系医師が足りないことが問題視されている。特に脳神経外科、心臓血管外科、泌尿器科において医師数が足りていない。そしてそれに比例するように、それらの科には女性医師が少ないのも事実である。医学生の中の半分が女性になって久しいが、科によって女性医師の比率が異なるのは、女性が選択しない理由があるということだろう。

およそ10年前におきた産婦人科医療崩壊の危機には、女性医師の就業継続が崩壊をくい止める鍵だとして、考えられる方策を実行してきた。その結果、琉大産婦人科の7割は女性医師であり、多くは育児をしながら医療を行っている。産婦人科はもちろん、母児の生命を預かる外科である。緊急対応も多く、昼夜を問わない。それでも、女性医師が「働きたい」魅力が現場にはあり、母親となっても戻ってくる。母親をとるのか、医師をとるかの二者択一ではない、安心してどちらでもできる環境を整えれば、女性医師は喜んで魅力ある外科を選択するのだと思う。沖縄県内の外科崩壊をくい止めるための一つの方法は、女性外科医の増加にあり、それはすなわち、「男女を問わない」外科医師の働き方改革であると考えている。